

もうひとつの「ご成婚秘話」を追って

岩瀬 達哉

(ジャーナリスト)

皇太子の「お妃選び」を取材していた三〇年ほど前、浩宮殿下がオックスフォード大学留学中にフランスを訪れ、その地で小和田雅子さんに会っていたという情報を得て、足跡をたどったことがある。この殿下のプライベート旅行から五年がたった、一九八九年六月のことだ。

その情報は、フランス在住の女性からもたらされたものだった。彼女は偶然にもパリのオリイ空港で「浩宮の一行」を見かけ、たいへん驚いたことがあると打ち明けた。そこにはシスターとともに若い女性がいて、それがお妃候補と騒がれていた小和田雅子さんだったからだ。

旧知の皇室関係者に確認すると、たしかに「浩

宮殿下」は留学中の八四年に二度、フランスを旅行していて、一度目の九月はドイツ国境に近いアルザス地方のコルマル市などを訪ね、その三カ月後の一二月、こんどはイタリア国境に近いサポア地方のメルビル村でクリスマスを過ごしたということだった。

日本の皇太子がフランスの地方都市を訪ねていけば、当然、地元紙は報道する。わたしはパリに行き、フランス各地の地方紙をくまなく見てみることにした。

いまならどの新聞もたいていデジタル化されていて、キーワードで「浩宮一行の旅」とた

たけば比較的簡単に探しだせるだろう。しかし当時はそんなものもなく、しかも地方紙となれば、ベルサイユ宮殿近くの国立図書館ベルサイユ別館にまで行かなければならなかった。一週間ごとにまとめられた新聞の束を、つぎつぎと

岩瀬 達哉（いわせ・たつや）



一九五五年和歌山県生まれ。二〇〇四年、『年金大崩壊』『年金の悲劇』で講談社ノンフィクション賞を受賞。

また、同年『文藝春秋』に掲載した「伏魔殿社会保険庁を解体せよ」によって文芸春秋読者賞を受賞した。他の著書に『血族の王 松下幸之助とナショナルの世紀』（新潮社）、『新聞が面白くない理由』、『ドキュメント パナソニック人事抗争史』、『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』などがある。近著は『キツネ目 グリコ森永事件全真相』（ともに講談社）。

引き出しては、片っ端から各紙の紙面を繰っていくと、ある地元紙に殿下の訪問を歓迎する様子が、旅程とともに報道されていた。空港で一行をみかけたという彼女は、ほらね、という具合になっこりと笑った。

彼女は二二歳でフランスに留学して以来、日本に帰ることなくパリに住み続けている。竹を割ったような性格で、ものごとに誠実であり、そのぶん怒りっぽく、あいまいさには感情を爆発させた。わたしはよく彼女を怒らせたが、なぜかうまがあつた。わたしがフランスで取材する際、いつも通訳をお願いしている。

遅い昼食をとった近くのレストランの、その店のトイレに備え付けられていたコイン式の公衆電話から、彼女は「浩宮一行」が宿泊したホテルや夕食を取ったレストランにアポを入れてまわった。取材の目的を説明し、訪ねる日時を調整するのは時間がかかる。コインはどんどん落ちていく。なくなりそうになると、わたしは店の主人のもとに走り、紙幣をコインに変えてもらう。何度もコイン交換に走っていたからだろう、店を出るとき、主人は彼女にこういった。

「ベトナムって遠いんだな」

翌々日、イタリア国境に近いメリベル村に向かった。そして村長や、皇太子のスキーガイドを務めた地元のスキー教師、さらにはメルビル村から車で二時間ほどの三ツ星レストランのオーナーなどを数日かけて取材した。このレストランは、ヨーロッパの王室の人々がお忍びで訪ねることで知られている。店のサイン帳にはモナコ王女の写真とサインのほか、「徳仁」と漢字で書かれたサインもあった。しかしメリベル村での手ごたえはいまひとつであった。

気を取り直して、つぎの旅行先であるコルマールに向かった。メリベルからコルマールまでは、ローカル線を乗り継ぎ、フランス第二の都市リヨンからTGVに乗るのだが、乗り換え駅とそれぞれの列車の発車時刻がややこしい。そこで最初の駅でメモにしてみらっていた。あとで知るのだが、ちょうどその日がダイヤ改正の初日で、メモを書いてくれた親切な駅員が見ていたのは古い時刻表だった。

わたしたちはのんびりと乗換駅の構内にある

カフェで時間をつぶし、そろそろ次の電車の切符を買おうか、と駅の窓口に行くと、もう切符は発券できないよと駅員は首をふった。

「発車ベルが鳴っているのが聞こえるでしょう。あなたたちが乗りたいという列車のベルで、もう間に合わない」

その日の夜、コルマール市の副市長で、「浩宮一行」が宿泊したホテルのオーナーに会う約束を取り付けていた。この列車に乗れないとなると約束をすっぱかすことになる。わたしはヘナヘナとその場に座りこんでしまった。

しかし、隣にたつ彼女は怒りを爆発させた。「このメモは、先の駅で書いてもらったものですよ。時刻表が古いといっても、その時刻表を使ってあなたたちが書いたものじゃない。わたしたちは、今日中にどうしてもコルマールに行かなければならないの。切符を売ってくれなくては困る」

一歩もゆざらず彼女は抗議し続け、その叫び声でホールがいっぱいになった。何事かと奥からでてきた駅長が事情を把握すると、列車を止めておけと指示したのち、すぐさま切符を発行

してくれた。

列車の窓からは、いつまでもベルが鳴りやまないことを不思議に思った乗客たちが顔をを出していた。わたしたちは発車ベルが鳴り続ける列車を目掛けてホームを一目散に走った。車掌も身を乗り出し、早く早く、と手招きしている。飛び乗るや、すぐさま列車は発車した。

おかげでその夜、コルマールの副市長に取材ができ、「浩宮一行」のなかに非常にきれいな女性がいたとの証言を得ることができた。持参したお妃候補一〇人の写真を見せると、彼は迷うことなく小和田さんの写真を抜き取った。

「この人です。当時はもう少し髪が長かったと思います」

そういうと、ウインクして続けた。

「大丈夫。フランス人は女性の顔を間違わないから」

帰国後、わたしは『週刊ポスト』に記事を書いた（一九八九年七月七日号）。この記事から四年後、一時、破局が伝えられた皇太子と小和田雅子さんの「結婚の儀」が執り行われている。

記事が出たあと、民放のある記者が宮内庁次長に「あんなこと書かれて抗議しないのか」と迫ったところ、次長はひとこと「絶句です」と語ったという。また通信社の社会部長は、記事でコメントしているフランス人全員に「ほんとうにこんな話をしたのか」と裏取り取材をさせたと言語り、「あれ、本当みたいね」といったが宮内記者クラブに公式発表された以上の記事が書かれることはなかった。

後日談がある。小和田さんのことを証言した副市長は口が軽いと批判されるようになり、そのホテルの経営はうまくいかなかった。一方、何も話さなかったメリベルのホテルやレストランは、いまだに栄えているということである。